

ひょうたん島通信

大槌発! 第13回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

大槌での学生生活を振り返って

山根 広大 大気海洋研究所海洋生物資源部門資源生態分野特任研究員

私は、2008年4月～2011年3月までの3年間、大槌にある国際沿岸海洋研究センター（沿岸センター）に博士課程の学生としてお世話になった。私は大槌町から50kmほど北にある宮古市の出身であるが、それまで大槌とはあまり接点がなく、沿岸センターに所属してはじめて大槌とよく親しむこととなった。沿岸センターはきれいな山と海に囲まれ、フィールド研究はもちろんのこと大槌の大自然を満喫できる素晴らしい場所にある。研究室から海辺まで徒歩1分程度で行くことができ、天気の良い夕暮れには学生同士でよく釣りを楽しんだ [写真]。釣れる魚でもっとも好きなのはエゾイソイナメ（通称どんこ）で、簡単に下処理し味噌汁にして食べると非常に美味である。また、波がある日は夜明け前に起床し、沿岸センターから少し北にある浪板海岸で波乗りを楽しんだ。海で波を待っていると時おり山田線を走っている電車が見えるのだが、運行本数がとても少ないため、それを時計代わりにして研究室へ向

かったものだった。

このように大槌では、釣りや波乗りなどをはじめ私生活でも海と親しんでいただけに、沿岸センターをはじめ大槌が大津波に飲み込まれていくのを目の当たりにしたときは現実として受け入れられず悪夢を見ているかのようなようだった。幸いにも私は多くの人に助けられ、津波・火事から逃れることができたが、博士論文になる前の研究成果が詰まったパソコン・書類などのほとんどのものが津波に飲み込まれた。しばらく経ってから波が引いた後の研究室の中から錆びたUSBメモリを見つけ、それから運良くデータを取り出すことができたが、あの地震・津波で研究生活が終わっても何らおかしなことがなかったらう。

地震と津波によって沿岸センターは甚大な被害を受けたため、大槌の学生はみな柏キャンパスに移動することになった。あれから2年近くたった今でも、大槌で学生生活を送った貴重な経験はいつも心の中にあり私の財産となっている。

私を育ててくれた大槌町と沿岸センターが少しでも早く復興し、学生たちがまた大槌に集まり大いに活躍してくれることを心から願ってやまない。私自身も、大槌にお世話になった人間として、そして岩手県沿岸を故郷とする人間として何らかの形で復興に貢献していきたい。



沿岸センターと蓬莱島をつないでいた堤防で海を眺める筆者（左）と釣りを楽しむ同期の勝又信博君。豊かな自然とたくさんの人に恵まれて贅沢な学生生活をおくることができた。（2008年7月28日撮影）

かわべこらム

過去は変えられない、未来は変えられる

Never Say Goodbye

大槌町では長く厳しい冬が終わり、遅い春を迎えようとしています。

震災から2年が過ぎ、街中の瓦礫もほぼ片付き、仮設店舗ですが様々なお店も見受けられるようになりました。しかし町民のほとんどはまだまだ仮設住宅に住み、不便な生活が続いています。待ち望まれている災害公営住宅の建設なども、もう少し先のことになりそうです。沿岸センターに関しても、被災した建物を最低限の補修をしつつ使用している状態が続いています。

私事ですが、3月末で大槌町（国際沿岸海洋研究センター）を離れる事となりました。震災を前後して過ごした3年間、大槌町は「心のふるさと」となりました。カラダは離れますが、心は常に大槌町にあります。

皆様におかれましても、引き続き大槌町ならびに国際沿岸海洋研究センターの復興にご支援下さい。

今までこのコラムにお付き合い頂き、ありがとうございました。



城山公園から一望する大槌町の様子（2013年3月29日撮影）